

挾間龍祥寺と別府宝泉寺

矢島 嗣久

一 大友氏豊後入国

豊後の守護については、源頼朝の家人である大友能直が鎮西一方奉行を兼ねて任命され、建久七年（一一九六）に入国したという（建久四年説もある）。

狭間氏初代の直重は大友氏三代頼泰の三番目の弟である。

大友氏初代の能直や二代の親秀は京都や鎌倉に出仕していて、ほとんど豊後へ来ていなかったようである。もともと大友氏の豊後入国に際しては能直の弟、古庄重能を先発として豊後に入国させた。豊後では豊後国地付きの大神系、阿南惟家は高崎山（大分市）で、弟家親は鶴賀城（大分市戸次）、大野泰基は大野郡神角寺山（現豊後大野市朝地町）にこもって抗戦したが、ともに大友氏から滅ぼされたという。

その後、大友氏二代親秀も京都にいたらしい。しかし親秀の息子たち、長子頼泰は三代大友宗家を継ぎ、二男は戸次重秀、三男は野津原能泰、四男狭間直重、五男野津頼宗、六男木付親重、七男田北親泰などすべて豊後国内の所領に土着している。

入国し土着した武士はその土地の名前を姓にしているから、姓氏を見ればおおむね土着した出身地が判断できる。

二 蒙古襲来

文永九年（一二七二）蒙古襲来につき九州の御家人が下向、異国防御につく。大友氏三代頼泰も豊後へ下向した模様。

文永十一年（一二七四）十月二十日、第一次蒙古襲来。大友氏第三代頼泰、豊後御家人をひきいて筑前博多で戦う。頼泰の三番目の弟直重も共に闘い、戦功があった。

大友頼泰と少弐経資の両人が現地最高指揮官で、頼泰が東方奉行（都甲文書）とあるので、経資が西方奉行であったと思われる。

頼泰は大友氏二代親秀の嫡子である。大友頼泰は文永十一年（一二七四）十月、及び七年後の弘安四年（一二八一）六月の蒙古襲来時に東方奉行として博多で御家人を指揮して防御に当たり、活躍して名をあげた。

当時の日本軍の戦いは個人が名乗りを上げて戦う戦法であったが、蒙古軍は団体戦が主であった。なお蒙古軍は「てつほう」という火薬を用いた武器を使用して日本軍を悩ませて、博多に上陸している。しかし、夜、船に引き揚げた際に台風が蒙古軍を全滅させた。

日本軍は蒙古軍の再来襲に備えて博多の海岸に防塁を築き、防御を固めた。

蒙古軍は七年後の弘安の役、弘安四年（一二八一）六月に再来襲したが博多湾岸の防塁のため上陸できず、また台風のため全滅の憂き目を見て敗退した。

頼泰はその後、豊後に入り、勝津留（現大分市上野丘）に屋形を建てて所領支配に当たり、正安二年（一一三〇）九月十七日に

七十八歳で没し、大分市岡川秋岡の常楽寺に葬られた。頼泰の子親時が、大友氏四代の家督を継いだ。

大分市田尻グリーンハイツの南側、岡川秋岡の常楽寺の前を東に向かつて約二百メートル進むと、大友氏三代頼泰の大きな五輪塔の墓が道路の北側左手に建立されている。

頼泰の戒名には「常楽寺殿」という号がつけられているが、この五輪塔は無銘である。

三 龍祥寺と放牛和尚

由布市挾間町黒川に籍水山龍祥寺がある。同寺は臨済宗建仁寺派で本尊は釈迦如来。狭間氏代々の菩提寺で、応安三年（一三七〇）、南北朝時代後期）、放牛和尚（一二八九〜一三七三）が開山であるという（『豊後国志』）。しかし「狭間家譜」（『大分県史料（26）』）諸家文書補遺（二）所収）によると、狭間氏初代の直重は、大友氏三代頼泰の弟で文永十一年（一二七四）の蒙古襲来（第一次）の時に出陣、功があったので挾間の地を賜ったとある。また法名龍祥寺ともあるので、鎌倉時代末に寺が造立された可能性もある。さらに狭間氏墓地内の五輪塔群の中には、康永二年（一三四三、南北朝初期）、貞和七年（一三五五、南北朝中期）と応安三年以前の塔が二基ある。このことから、応安三年以前にすでに龍祥寺は造立されていたとも考えられる。応安三年以前に龍祥寺が造立されていたとするならば、放牛和尚は開山ではなく、中興の祖ということになるが、ここでは一応伝えに従い開山としておく。

開山とは広辞苑によれば、（山は寺の意）寺院の創始者。また、宗派の祖。開祖。開基。中興とはいったん衰えたことを再び盛んにすること。また、その人。とある。

放牛和尚は、放牛光林といい筑前（福岡県）の生まれ、鎌倉時代から南北朝時代に活躍した臨済僧である。文保二年（一二三二）に入元（中国）し、勉学の後、正中元年（一三三二）に帰国した。筑前の顕孝寺（福岡市東区多々良、浄土宗、大友氏六代貞宗の建立）、万寿寺（大分市）、建仁寺・天龍寺・南禅寺（いずれも京都）などに歴任した僧である。

晩年に、勝楽寺（筑前）、龍祥寺（豊後挾間）の開山となったと伝えられ、応安六年（一三七三、南北朝中期）に死去した。

龍祥寺には南北朝時代の作といわれる彼の頂相（禅僧の肖像画）がある。絹本着色放牛光林像、国指定重要文化財。

積水山龍祥寺 大字挾間字黒川

臨済宗建仁寺派 本尊釈迦如来

龍祥寺は応安三年（一三七〇）に放牛禅師が開いたと伝えられるが、鎌倉時代にはすでに造立されていた可能性もある。この地を支配した大友系狭間氏の菩提寺である。

「雉城雑誌」によると、応永十三年（一四〇六）建立の塔頭として幡龍院・龍門菴の名が出てくるが、「今堂園と云う地、即ち其の旧址なり」とあるので、江戸時代末にはこれらの建物はすでに無かったと思われる。ただし清白菴については、狭間氏墓地（清白菴

ともいう)内にある元禄十一年(二六九八、江戸時代、前、中期)銘の石塔に「清白菴主歴堂□士 造立之」とあるので、少なくとも元禄年間まで存在していたことは確かである。大分郡内には大蔵寺(庄内町)・慶福寺(狭間町鬼瀬)などの末寺がある。

龍祥寺は後に薩摩島津勢の天正の兵乱(天正十四年、一五八六)で消失し一時衰退するが、延宝八年(一六八〇、江戸時代初期)に二六世卓庵和尚が再建している。



龍祥禅寺



放牛禅師

四 狭間町、狭間氏五輪塔群

JR久大本線の向之原駅から下車、北に向かって進み、向之原商店街を横切り狭間小学校の前を通って国道二百十号線を横切ると右手に龍祥寺がある。昭和五十六年(一九八一)、二百十号線の新道が完成した際に龍祥寺の山門と本堂が分離され、国道の上に山門と

本堂をつなぐ歩道橋ができた。

本堂横には「永禄五(一五六二)年」銘の石幢(県文化財)をはじめ、無名ながら室町中期頃(一四〇〇)の作とみられるりっぱな石幢数基がある。

寺の西側約百mにある精白庵跡には、中世当時この狭間町地方(阿南荘)を領した大友氏一族の狭間氏累代五輪塔群が二十基余並んでいる。

狭間氏は大友氏三代頼泰の三弟直重、狭間四郎を祖とする。

墓地全域は県指定史跡で、そのうち三基は県指定有形文化財である。三基の内の一つには康永二年(一二三三、南北朝時代中期)六月と記されている。

大きさは一〜二mで「貞和七(観応二・一三五二)年」など南北朝(いづれも北朝年号)のものから「天文十二(一五四三)年」銘の室町末期のものまであり、狭間町の代表的史跡である。造立の期間はおよそ二百年にわたっていた。



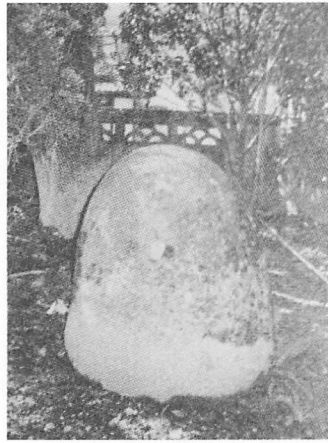
狭間氏五輪塔群

五 狭間直重の怪力

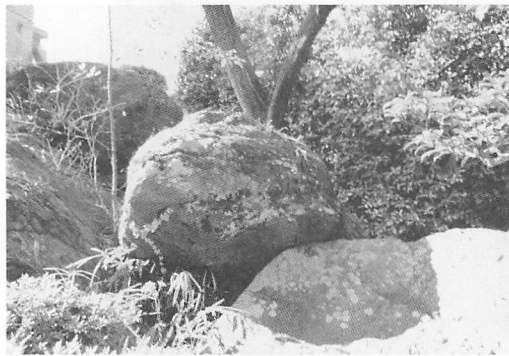
大友氏三代頼泰の弟、狭間氏初代直重は狭間を支配する剛の者で

あった。前述のように直重は兄頼泰に従い、博多津にて蒙古軍と戦った武者である。

郷里の豊後では、普通の人々が持ちあげられないような石を軽々と持ち上げたという話が伝えられている。一つは由布市挾間町の鬼瀬、池の上地区にある民家の庭先の石、もう一つは別府市西野口の民家の庭にある丸い石である。この別府にある石は狭間直重の「かむげ石」ともいわれている。いずれも普通の人間では持ち上げられないような大石である。



狭間直重の大石（鬼瀬）



別府西野口のかむげ石

六 大友家二階崩れの変

天文十九年（一五五〇）二月十日、大友家の二階崩れの変が起こった。場所は府内上野丘（現大分市）の大友館である。場所は現在住宅化しているが、屋形跡の土塁の一部が残っていて大きな石碑

も有り、歴史公園化とされている。

大友氏二十代義鑑よしあきには三人の男の子がいた。長男の義鎮よししげ（五郎・塩法師丸・後の宗麟）二十歳、次男の晴英はるひさ、義鑑の後妻の子で三男の塩市丸、三歳である。

父義鑑や塩市丸の生母である義鑑の後妻が家臣の入田丹後守親誠にゅうたに塩市丸擁立の陰謀を頼んだ。

義鑑は更に家臣の斎藤播磨守長実ながざね、小佐井大和守・津久見美作守・田口藏人佐くらんどのすけにこのことを命じたが、いずれも承知せずに座を立ってかえった。義鑑は怒って、翌日二月十日の朝、斎藤・小佐井の両人が登城する途中、竈門新助かまど・小田隼人はやとに命じ、待ち伏せして両人を斬らせた。津久見・田口両人はこれを知って、裏門から殿中の二階の間に乱入して津久見が塩市丸を殺し、田口は義鑑の奥方および息女二人、その他侍女数人を斬り殺した。両人はさらに桐の間にふみこみ、たちむかってきた義鑑を津久見が傷つけたが、近習の為、津久見、田口の二人とも討ち取られた。

事件を知った五郎義鎮は別府の浜脇から府内へ戻り、事後処理を済ませた後、大友氏二十一代の当主となった。別府浜脇の大友館はのちに東公園となり、現在の別府市立浜脇中学校及び崇福寺そうふくじ付近である。

その後、大友家に対して謀反を起こしていた菊池義武（大友義鑑の弟、宗麟の叔父）は直入郡木原（竹田市城原きばら）にて殺された。

大友義鑑の墓は臼杵市野津町寺小路の到明寺跡、国道十号線の西側に近く、民家の庭先にある。

七 日向高城・耳川の敗戦

大友氏は天正六年（一五七八）三月、日向の土持親成征伐の軍をおこした。土持征伐では大友義統が三万の大軍で日向松尾城の土持親成父子を攻め落とし、門川（宮崎県東臼杵郡門川町）・汐見・日知屋（日向市）の諸城をうばった。

宗麟は日向国にキリスト教的理想国家を建設したい考えであった。同年九月、宗麟はみずから大軍をひきいて海陸から日向に出陣した。宗麟は臼杵から船で日向に向かった。宗麟の本陣は延岡郊外の務志賀（無鹿）で、ただちにそこに仮会堂を建て、ついで本建築や住院建設にかからせた。

田原親賢（紹忍）を第一線総指揮官とする戦陣は長駆南下し、島津家久（義久の弟）の軍を破って財部城（宮崎県児湯郡高鍋町）に退却させ、諸軍は山田信介有信ら五百の小勢のまもる小さな高城（宮崎県児湯郡木城町）を包囲して兵糧攻めにした。

島津義久は大軍をひきい十一月末鹿兒島を発して砂土原（現宮崎市砂土原）につき、弟義弘は都於郡（宮崎県西都市）、義弘の弟家久は財部に着陣、ともに高城を救援した。

大友軍は臼杵・柴田・斎藤らが戦陣をあらそって小丸川を渡河し島津勢に打ち取られた。対岸に伏せていた島津軍によって、大友勢三千人が打ち取られたという。大友軍は高城の北の宗麟原（かんかん原ともいう）で多数が討たれ、総くずれで退却した。

敗走の大友軍はさらに北の耳川（現美々津川）で島津軍の追撃にあつて討たれ、戦死者はすべて二万人にも達した。

大友氏の家老たちは宗麟の再出馬を請い、危機を乗りきる状態であつた。

八 薩摩島津軍の豊後侵入

天正六年（一五七八）の日向戦勝ののち、島津義久は日向一国を略し、肥後の相良義陽を降して北上してきた。肥筑の諸将は多く島津にしたがつた。ただ筑前では、大友方として立花道雪（戸次鑑連・養子統虎（宗茂、高橋紹運、しょううんの子）父子と高橋紹運・統増父子が、立花・岩屋・宝満の諸城を死守した。しかし道雪は天正十三年（一五八五）に筑後高良山の陣中で病死し、宝満城は高橋紹運の留守中に筑紫広門に奪取された。立花道雪は大友氏「三老」の一人で、器量すぐれた重臣であつた。このような危機に対処して、老臣らは宗麟の出馬を請い、豊臣秀吉の助けをもとめるとし、十四年三月、宗麟が大坂へ行き救援を懇願した。秀吉は九州平定の気持ちを持っていたため、宗麟の願いを聞き入れた。

秀吉は島津征伐のため、四国の仙石秀久を監察使とし、長宗我部元親・信親父子が率いる四国勢を救援させた。その間に島津義久は筑前岩屋城を攻め落とし、城主高橋紹運を自殺させた。しかし、島津軍は秀吉の大軍が九州入りをしたので、退却を始めた。

大友義統が豊後府内（現大分市）を留守の間に、島津家久は日向境から、家久の父義弘が肥後境から豊後に侵入した。豊後で善戦したのは志賀氏の竹田岡城、佐伯氏の梅牟礼城、大友宗麟の臼杵の丹生島城であつた。豊後府内（現大分市）は島津軍に侵攻された。し

かし、三月には秀吉が大軍を率いて九州へ侵攻したため、島津勢は豊後から退却し、五月、秀吉に降伏することになった。

九 陣屋の村

由布市挾間町、陣屋の村童里夢館は国道二一〇号線、由布市消防本部付近から北へ進み、北西方向へ六〇〇メートルほど進むと左手にある。ここには温泉もあり、歴史民俗資料館もある。吊り橋付近の駐車場から西側へ山道を進むと途中に薩摩島津軍が侵攻した際に村人が立てこもったといわれる陣屋の跡もあり、更に登ると高長谷山山頂二三七mに達する。西側眼下には国道二一〇号線と大分川が流れていて、対岸には九州電力の篠原水力発電所を望むことができる。



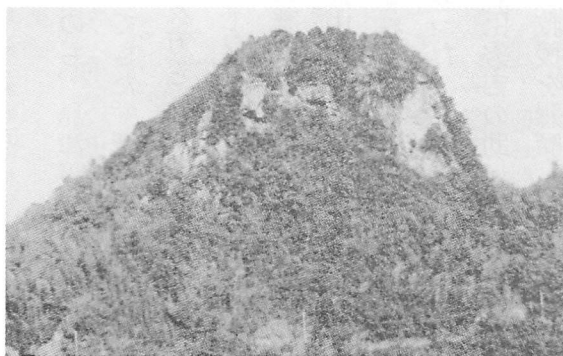
陣屋の跡

十四年（一五八六）の薩摩の豊後侵入が始まった。島津軍は日向から梓峠（佐伯市宇目町）を越えて大野郡に入った家久軍と、肥後から直入郡に入り朽網（現竹田市久住町）に本陣を敷いた義弘（家久の父）軍の二隊に別れて豊後に入ってきた。大分郡挾間に入り、狭間鎮秀と対決したのは朽網に本陣を構えた義弘軍である。

「西治録」によれば、大友義統が戸次河原の合戦で大敗したあと高崎山城に入り、さらに宇佐郡龍王城（現宇佐市安心院町）に敗退するにあたって、狭間山城守鎮秀を高崎山城に留めたと記している。続いて「阿南庄船ヶ尾権現嶽合戦之事」では、薩軍に対して戦った。しかし、その後、狭間鎮秀は薩軍、島津家久軍に対して人質を交換して和平又は降伏したと記されている。

秀吉軍の九州入りに際して薩軍は敗退、薩摩へ退却後降伏した。

天正十六年（一五八八）六月、大友吉統は宗像掃部介、大津留民部少輔に命じて狭間山城守鎮秀を油布院にて殺害した。由布市湯布院町川上津江には挾間鎮秀の墓が存在している。



権現岳城

十 狭間鎮秀と権現岳城

大友系狭間氏は初代能直、二代親秀、三代頼泰の三弟直重を祖として狭間郷を領した。

天正六年（一五七八）の豊後による日向侵攻の報復として天正

十一 豊後除国

国内統一をおえた秀吉は、天正十九年（一五九一）秋に朝鮮侵入

を企てた。命令を受けた大友吉統は中津の黒田長政の指揮下に入り、同年三月六千人の兵を率いて出陣した。

文禄二年の正月、明（現中国）の大軍二十万が平壤を守備していた小西行長の陣に押し寄せた。大友軍は隊を乱して退却した。その結果、秀吉から豊後国は没収され、大友吉統は毛利輝元（毛利元就の孫）に預けられた。

豊後は細分化され、小藩分立の状況になった。武士達は他藩に就職するか地元の庄屋や農民になった。

吉弘嘉兵衛統幸は従兄弟の筑後柳川の立花統虎の許に寄宿し、二千石を受領していた。

田原紹忍親賢と宗像掃部は朝鮮の役には秀吉の命により出陣せず、竹田の岡藩、中川氏の客家老となっていて田原紹忍が三千石、宗像掃部が二千石を受領している。

十二 別府太平山宝泉寺

臨濟宗妙心寺派、本尊 釈迦如来座像。別府市南石垣。現石垣西三丁目八。

寺院の場所は県立鶴見丘高校から百メートルほど東側に下った所に位置している。

本尊は釈迦座像。縁起によると、至徳二年（一三八五）大友氏十一代親著を大檀那として、独芳清曇禪師が開基したといわれる。その後、一時すたれたが、寛文五年（一六六五、江戸時代初期）、別府石垣の出身であり府内（大分市）万寿寺の住職であった乾叟禪

師が再興し、同十年に宝泉寺の寺号が許可されたという。

同寺は、慶長五年（一六〇〇）石垣原合戦で戦死した大友方の武将吉弘嘉兵衛統幸の位牌があり、その菩提寺となっている。

この宝泉寺には吉弘統幸の武者絵があり、これには「統雲院殿傑勝運英大居士」という戒名が記載されている。

宝泉寺の山門の内側右手に「太平山宝泉寺縁起」が記された木製の掲示板がある。

太平山宝泉寺縁起

当寺は承安三年（一一七三）法茲法師の創建にして天台宗石雲山宝泉寺と呼び、本尊は阿弥陀如来、両脇に観音勢至の式菩薩なり、爾来式百拾余年の変遷により堂宇は荒廢に頗す。時に至徳二年（一三八五）大友拾壹代親著公之を再建し、自ら当寺の開基となし、本尊に釈迦牟尼如来、両脇に文殊普賢、式菩薩を安置し臨濟宗妙心寺派に属したり、後衰えたが、寛文五年（一六六五）石垣村中石垣屋田直政家出身の萬壽寺住職乾叟禪師が再興し山号を太平山に改む。偶慶長五年（一六〇〇）兵せん（災い）に罹り（石垣原合戦）鳥有に帰せしが久留島藩主の建物を以て其の堂宇に充て、爾来三百



別府宝泉寺

余年に及び頽廢甚だ大を來たし、ここに昭和二年（一九二七）現今の本堂を再建す。

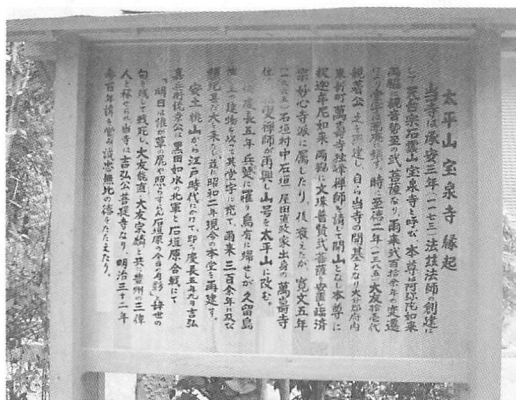
安土桃山から江戸時代にかけて、すなわち慶長五年（一六〇〇）九月吉弘嘉兵衛統幸公は黒田如水の北軍と石垣原合戦にて

「明日は誰が 草の屍や照らすらん 石垣原の今日の月影」

と辞世の句を残して戦死し、大友能直よしなお・大友宗麟と共に豊州の三偉人と称せられ、当寺は吉弘公菩提寺なり、明治三十二年（一八九九）参百年講を営み、誠忠無比の徳をたたえたり。

「別府市誌」昭和六十年版によれば、宝泉寺、本寺は別府市南石垣字榎にあり、はじめの山号は石雲山、開基は清曇禪師、当時府内（現大分市）万寿寺に止住した。大友式部大輔親者（ちかひさ、ちかひと）は禪師に帰依していたので、親者は康応元年（一三八九）本寺を修造したが、それによって万寿寺の末寺となった。以後盛衰を経て、寛文年間（一六六一〜七二）再興し、山号を太平山と改め、現在臨濟宗になった。（『速見郡史』三七四頁）。

本寺は石垣庄に康応元年（元中六



年）以前に建立されたことになるが南北朝時代には大友氏が地頭職に入りこんでいたことを意味するものであろう。

本寺には石垣原合戦に戦死した吉弘統幸の位牌をお祀りしている。江戸時代の宗派は臨濟宗妙心寺下豊後万寿寺末になっている（『江戸幕府寺院本末帳』）。

十三 別府石垣

別府の石垣地区、石垣原扇状地は火山活動に伴う安山岩質の礫れき・岩層が表土近くに特に多く埋積している地域であり、石垣を築くには好都合であった。第二には、石垣原扇状地は、東に別府湾、西に鶴見岳を望見できる風光絶佳の地域であるが、これは又、風水害に悩まされる悪条件ともなった。そこに石垣を築き、風水害から家を守らねばならなかった理由もある。第三には耕地化に際して石の処理法として積みあげ垣に用いた場合もある。

十四 石垣原合戦

石垣原合戦は慶長五年（一六〇〇）に豊後別府にて九月十三日に戦いが行われた。二日後の九月十五日に行われた関が原の戦いに際して、西の関が原ともいわれている。東軍徳川家康方は、中津の黒田如水官兵衛孝高、細川方松井康之の軍勢併せて二千数百余、西軍方は大友宗麟の嫡子大友義統（吉統）率いる吉弘嘉兵衛統幸、宗像掃部鎮統、田原紹忍親賢の九百である。

大友義統は豊臣秀吉から豊後除国の処分を受けていたが、秀吉が

死去したため、追放の処分を許され、京都本能寺に滞在していた。その際、西軍の毛利輝元及び石田三成の誘いに応じて旧領の豊後入りを果たし、別府の石垣原の合戦に臨んだ。しかし、武運つたなく東軍、黒田、細川連合軍に敗れ、ここに大友氏は完全に滅亡することになった。

吉弘統幸、宗像掃部は討ち死に、大友義統は黒田如水に降伏した。田原紹忍親賢は戦いの後、豊後竹田の中川氏を頼り、府内（現大分市）にあった中川氏の船奉行の所へ落ち延びた。まもなく親賢は佐賀の関合戦に参戦して臼杵の太田勢と戦い、死亡した。佐賀の関にあった紹忍の墓は工場建設のため現在取り除かれている。

十五 吉弘嘉兵衛統幸

豊後大友氏の分かれに国東田原氏が有り、その分かれに国東吉弘氏がある。

吉弘氏は代々国東武蔵を領していた。現在の国東市武蔵町である。県道五十五号線の吉広川のそばに楽庭八幡宮^{がくにわ}があり、毎年七月下旬にはそこで吉弘楽が奉納されている。道路の左手、南側の民家の庭先には吉弘氏七代の墓がまとめられている。

その後吉弘氏は国東の豊後高田、長岩屋の



吉弘統幸像（宝泉寺蔵）

屋山城（八面山）に移住して、その麓、都甲松行に屋敷があった。下長岩屋の松行にある吉弘氏の菩提寺金宗院は現在無住であるが吉弘統幸の墓が子孫によって建てられている。

石垣原合戦があった別府市には宝泉寺のほか石垣に吉弘統幸を祀っている吉弘神社が大正十一年（一九二二）に建立され、平成十二年（二〇〇〇）には一億円の寄付金により拝殿が新しく建立された。神社の後方、西側には無銘ながら吉弘統幸の墓石や細川家から寄贈された石殿も存在している。

十六 挾間町ボランティアガイド

平成二十四年（二〇一二）十一月二十一日（水）、由布市挾間末来館（中央公民館）にて挾間町ボランティアガイドの皆さんにプロジェクトを使用して「別府八湯ボランティアガイド」について筆者が講演を行った。最後の質疑応答の際、挾間町向の原にある龍祥寺の先代住職の奥さんから質疑があった。内容は「龍祥寺の開基、放牛禅師が別府の石垣の住民が食料に困っていることを知り、里芋の栽培方法を教えて感謝された。戦時中前後まで別府から挾間の龍祥寺までお礼に来ていたが、その後途絶えている。何か分かったら教えて欲しい」との発言である。

別府史談会副会長の外山健一氏の調査のお陰で別府での様子が判明した。

翌年の平成二十五年四月に龍祥寺の奥さんに電話で報告すると大変喜ばれた。その際、奥さんは「別府の宝泉寺は龍祥寺と系列が同

じ寺院ですよ」とおっしゃっていた。

挟間の龍祥寺の宗派は臨済宗建仁寺派、別府の宝泉寺は臨済宗妙心寺派である。

外山氏の調査によれば、別府市在住の山下久氏、九十二歳が若いとき宝泉寺から頼まれて大分郡挟間村（現由布市挟間町）の龍祥寺までお礼に行っていた。山下氏は、天皇陛下をお守りする近衛兵であったという。

なお、外山氏によれば、龍祥寺へお礼に行ったもう一人は別府市南石垣の故荒金梅枝（男性、荒金信生県会議員の父親）であったといわれている。

謝辞 別府市在住、別府史談会副会長の外山健一氏に挟間町の龍祥寺と別府の宝泉寺とのかかわりについて御教示いただきました。

ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

その他、ご教示いただいた方々、由布市挟間町の龍祥寺、別府市の宝泉寺、二宮修二挟間史談会会長、佐藤末喜挟間史談会幹事。

十七 参考引用文献

大分県の歴史 渡辺澄夫著 昭和四十六年 山川出版社

新版 大分県の歴史散歩 一九九三年三月 山川出版社

挟間町誌 昭和五十九年十月 挟間町

別府市誌 昭和四十八年八月 別府市

別府市誌 昭和六十年三月 別府市

各駅停車 全国歴史散歩 大分県 大分合同新聞社編 河出書房新社

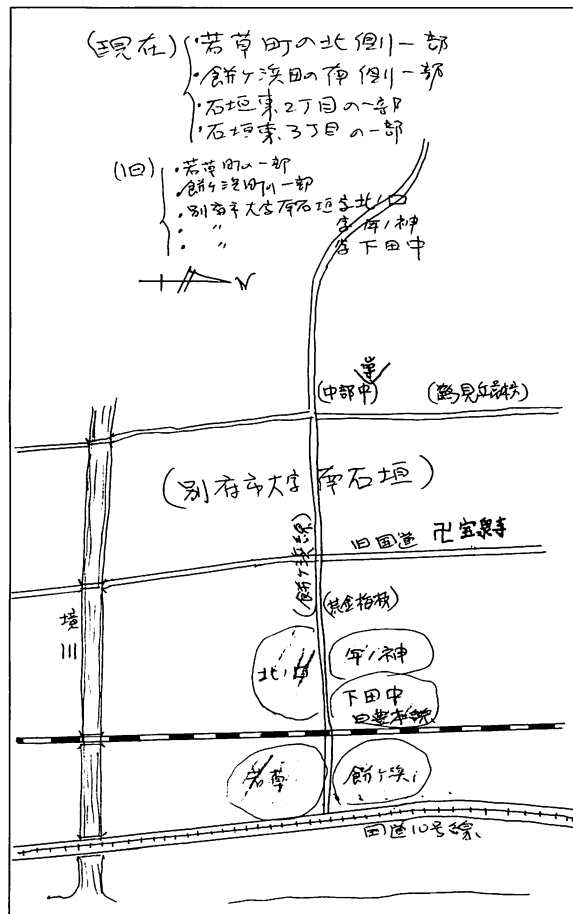
昭和五十八年十一月

元代の中日文化交流 入元僧と元代文人との交流から

包 黎明著 広島大学院教育学研究科紀要 第二部

抜粹 二〇一一年十月

角川・第二版 日本史辞典 角川書店 一九九五年十一月 第二版



地図：外山建一氏作成
日豊本線付近の囲み
は昭和40年頃まで
里芋を栽培していた
場所です。石垣地区
区画整理事業が完成
する頃に栽培が取り
やめになりました。